

ひかりの園だより

ともに

第 59 号

発行：平成 25 年 10 月 20 日

編集：法人本部事務局



社会福祉法人 ひかりの園

特集 座談会 若手リーダーに聞く 「ともに生きる」とは

- 2 P 理事長挨拶「おかげさまで 40 年」
- 3 P 工房ゆう起工・法人合同研修会
- 4 P 座談会「ともに生きる」とは
- 10 P ボランティア紹介 ボランティアサークル波紋
- 11 P 職員紹介「私たち、ひかりの園の職員です」
- 12 P ワンポイント介護《認知症とうまく付き合おう》

おかげ様で四十年

いのちといのちの出会いの中で

理事長 川島順三



まいりました。昭和四十九年に浜松市の委託事業で始まった浜松市根洗学園は、現在は「児童発達支援センター」として保育や療育支援や子育て支援、保育園や幼稚園への巡回、家族への相談支援、学童児への支援など児童福祉の重要な要を担うまで発展しました。また、昭和五十八年に根洗作業所を開設し、平成元年には青葉の家を併設し「浜松協働学舎」として障害者福祉事業を展開してまいりました。浜松協働学舎根洗寮やケアホーム等地域で暮らしの場も広げています。それぞれ、ご利用者にとって最も望ましいサービスのあり方を模索しながら今日に至っております。

いのち（生命）とは不思議なものです。この世に生を受けたものはいつか障害を受ける可能性があります。ある日突然交通事故で障害を被るか、年老いて脳梗塞で倒れるか或いは生まれてきどこか障害を持っているか、これは時間差の問題であり、現在健常で健康であることは奇跡的に有難いことで、そうでない人に少しだけでも力になりたいし、その責任があると思います。人間のそして私たち個人の本質は何か？それはその人の持っている良いものが分かり具現化した時がその人の本質です。

人生には不思議な出会いと縁があります。出会いとは自分の良いところを見つけ気づかせ

てくれる人又は機会であると言われています。人は誰でもその人にしかない良いものをもっていて、それを見つけそれに気づきそれを生かして他人のために役立ちたい願望があります。人の良いところに気づき、お互いに認め合い、生きてゆくことはどんなに素晴らしい生き方かと思ひます。縁とはそういう人間の本質を絶えず求めている人同士を結ぶ絆であるうと思ひます。当法人の法人訓『喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい』これは聖書の一節ですが、山田前理事長が当法人にふさわしい理念として採択され、役職員一同このことを絶えず意識して仕事に運営に当たり預かって力を与えてくれたものと感謝するものであります。利用者も介護者もそれぞれの良いもの（本質）が生かされてお互いに人生を全うできたなら最高の幸せではないでしょうか。

人間の根源的本質として人は大自然の中で生きて、生かされている、人には寿命がある、一人では生きてゆけないと云う真理に立脚して考えることが正しい判断だと思ひます。歴代の理事長、園長、施設長の皆さんがこのような認識と判断のもとに諸施設を運営、経営されてきたおかげで今日あることを思うとき、改めて諸先輩と現役の要職にある皆さんと全職員に敬意と感謝を申し上げ末永く発展を願うものです。

今から約四十年前に発足した社会福祉法人ひかりの園が今日このような規模になると誰が予想したでしょうか。三人の熱心なカトリック信者の熱い思いから当法人が設立認可を受けたのは昭和四十七年、そして翌四十八年に静光園が開園されて今年で四十年になります。

先ず高齢者福祉事業として静光園がスタートし、その後第一、第三静光園が増設され、デイサービス、居宅介護、そして小規模多機能型居宅介護事業なごみの家の開設と在宅ケアも拡充して

西区大人見町 生活介護・工房ゆう起工



浜名湖大人見海岸から高台に上がった大人見団地の南側、浜松環状線から少し北に入った場所が「工房ゆう」の建設地です。社会福祉法人ひかりの園で

は、平成二十五年度の事業として浜松市西区大人見町に、新しい障がい福祉の拠点を建設します。優しく、ゆったりと過ごせる場所になるようにと「工房ゆう」と名付けました。生活介護（障害者総合支援法による）定員二十名、日中一時支援二名の規模で、平成二十六年四月より運営を開始します。

八月二十九日には、カトリック浜松教会の山内神父により起工祝別式が執り行われました。式には、ご利用者、建築工事に関わる方々、地元の関係者、法人職員が集い、工事の安全を祈念しました。



平成 25 年度社会福祉法人ひかりの園職員合同研修会

今年の全施設合同研修会は、八月十日（土）に、浜松市教育会館にて開催されました。平成二十三年に東三方町に開設された浜松市教育会館は、音響やステージを備えた快適な研修会場が設置してあります。当日は法人の各施設から九十名程が参加しました。



研修会に先だって職員永年勤続表彰が行われ、今年は三十年勤続表彰者が一名、二十年勤続表彰者が二名、十年勤続表彰者六名と、計九名の職員が表彰されました。

本年度の研修会では、日々ご利用者の支援や介護の現場で、サービスの質の向上を目指して取り組んでいる実践研究発表が行われました。静光園からは『ささやかな声に答える』、第二静光園から『希望に添う』、第三静光園から『寄り添う支援』、ねあらい学園から『専門職の責任と療育の根拠』、浜松協働学舎から『相談支援と権利を代弁する』というテーマで、五施設より研究発表が行われました。参加された皆さんは発表に熱心に聞き入っていました。自



平成二十五年度 永年勤続職員表彰者

- 三十年勤続職員
京極浜子（ねあらい学園保育士）
- 二十年勤続職員
菊地一浩（ねあらい学園保育士）
- 古田規実子（第三静光園介護職員）
- 十年勤続職員
永田竜也（第二静光園相談員）
白柳亮祐（第三静光園相談員）
袴田静香（第三静光園介護職員）
菊池春子（第三静光園在宅職員）
榎木栄人（根洗作業所管理責任者）
角田由枝（工房めい生活支援員）



若手リーダーに聞く 座談会

『ともに生きる』とは

社会福祉法人ひかりの園は、児童から高齢者まで、それぞれの立場に立った支援の必要な人を支える仕事をしています。今回は、それぞれの分野で次世代を担う若手のリーダーの方が集まり、それぞれの福祉の仕事に賭ける思いを聞きました。福祉の仕事のどんなところに魅力を感じているのか、どんなところで壁に突き当たっているのか、これから先どういう未来を描いているのかインタビューしました。聞き手は栗本昌紀第三静光園園長です。

栗本 まずおひとりずつ仕事の内容や、今、力を入れていることについてお話しいただきます。

多様な子どものニーズに応える

京極 ねあらい学園は幼児の通園施設です。生活する力を育てたり、お友達と遊ぶこと、コミュニケーションを育てることを大事にしています。ねあらい学園の事業は多様です。毎日利用される「毎日通園」の他に「選択通園」があります。「選択通園」には、いつもは幼稚園や保育園に行っているけれども、集団にうまく乗れないお子さんや友達とトラブルが多いというお子さんが幼稚園で過ごした後、放課後に施設を利用して療育を受ける「こじかグループ」、週一回幼稚園をお休みして丸一日療育を受ける「らいおんグループ」があります。

す。一歳半検診でなんとなく気になるお子さんに、保健師さんであったり声を掛けてもらって、ちよつと来てみて遊んでみませんか、っていう形で、親子で来てもらう「親子教室」もあります。そして、昨年度から学校に上がったお子さんを支援する「学童ねあらい」を始めます。預かり中心ではなく子どもの生活面を見ながら、学校では誉められる経験が少なくなってしまうので、成功体験をいっぱい積み重ねて帰ろうっていうようなことをやっています。

保育所や幼稚園の巡回にも行きます。相談業務も大切な分野です。作業療法士や言語聴覚士もいますので、土曜日を利用して「ことばの教室」や「からだの教室」と個別の教室を設けています。

幼児期は、やったらやっただけ、丁寧に接したら接しただけ変わっていくきます。働きかけ方を伝えていくことでお母さんやお父さん、その他子どもを取り巻く人たちの理解が深まり、そのことで子ども自身も生活しやすくなる

家族を支える

京極 大変さでは、家庭の問題にどこまで入っていったいいのかっていうことに悩みます。エネルギーがちよつと少ないお母さん、メンタル面で弱いお母さんたちなど、気にかけてあげたいお母さんたちがいますので、そのお母さんたちに寄り添い、どういう支援ができるかを焦らずに考えるようにしています。



親御さんに「障害を受け止めなさい」とは言いません。子どものちよつとした変化を伝えて、お母さんがそこで受け入れられなくて喜べないにしても、訴え続けていくことが大事です。「子どもは変わっていくんだよ、働きかければ変わっていくんだよ」と伝え続けていくことを大事にしています。「いままでこう言われてきたことはそうなんだな」って気づいてもらう時が必ずあると思っています。

菊地 「知的障害児通園施設」という名称から「児童発達支援センター」という名称に変わったのはとてもいいことだったと思います。「発達を支援する」と言うのと「生きる上で身に付けていきたいこと」を「お子さんにはこういう力をつけていきたいですね」と親御さんと目標を共有できるようにしました。それが実際に子どもの力として発揮されると、この仕事の重みをずっしりと感じます。

根洗学園保育士 京極浜子

発達の支援を必要とするお子さんの数は増えていきます。以前では、小学校でもちよつと落ち着きのない子や学習が遅れている子は普通クラスの中にいました。

今は、そういうようなお子さんたちは、「手厚い」形で支援していこうと「特別支援教育」の対象となる。これが幼児教育や保育では早期発見早期療育と、先取されています。二桁の掛け算が年長さんでできちゃう子がいるんですね。パニックになったときに「12×12は？」って声をかけると、頭の中でポンポンポンって計算して「えー144」って答える。で「すごかったねー」っていうと、それで気持ち切り替わる。ちよつと前じゃ考えられないことです。支援の幅も広がっていて、それぞれに対応できる我々のスキル、対処法を身に付けていくことが求められています。

京極 子育てで一番大変なのはお母さんです。ねあらい学園では母親教室や親の会で、親御さんたち同士が横のつながりをつくる支援を行っています。「自分だけじゃない」と、仲間がいて、話せる相手がいることは親御さんの人生の長い支えになります。お父さんに親子合宿に参加してもらったり、懇親会を通してお父さん同士もつながっています。

自分の居場所をつくる

栗本 ねあらい学園では、子どもさんを一人の人間として認めるところからの働きかけを大切に、実践しているとお話を伺って知りました。

坂中 浜松協働学習会は、他に居場所の見つからない人たち、他の作業所に行った方たちでもなかなかじめなかつた方たち、行動に若干障害や問題があったり、知的障害だけではなく重度の身体障害を併せ持つ方たちなど、誰でも受け入れてきましたから、毎年のように通所型の施設を増やしてきました。

次は保護者から出てきました。「私達がいなくなった後どうすればいいの」って「親亡き後」が課題となり、二十年前は重度の障害のある人が暮らせるようなケアホーム等はなく、入所型施設が必要だと根洗寮ができました。その中でも「浜松協働学習会らしさっていうのは何か」が議論されました。入所施設でも、一人ひとりのプライバシーが大切にされる、好きな事を好きなようにできること、集団が苦手な人が多いので、ユニットケアで全部個室にしようということになりました。個室でやろうというのは、当時は反対の声もありましたが、やってよかったと思います。

根洗寮が出来てショートステイの体



根洗学園保育士 菊地一浩

制ができたこともとてもよかったと思います。在宅の人で、家にいるとなかなか落ち着かない、集団の中にも落ち着かないっていう人たちの「避難場所」が出来た、根洗寮に行けば自身身のプライベートな空間を持てるようになったことは画期的だと思います。今まではそんなに気にされてこなかったことですが、そういう安心できる場所があるっていうことが、地域での暮らしの安心に繋がっているんじゃないかなと思います。

栗本 根洗寮は「職住分離」すなわち仕事と住まいを別にすることにこだわっています。それまであった施設はその施設の中ですべてを完結させようとしていたところに間違いがあったと...。そういうこだわりやポリシーが浜松協働学習会を支えているのですね。

地域で暮らす

坂中 私は今、ラポール根洗というケ

アホームの世話人をやっております。ラポール根洗は、浜松協働学舎の中で一番最初にできたグループホームで、根洗寮の入居者の地域生活移行の目的で平成十一年にスタートしました。入所型施設ができるまで親亡き後の不安は軽減されるけど、根洗寮に住んでいる人からは、やっぱり「集団生活はつらい」「もつと自分らしい暮らしがしたい」「施設から出たい」という声も上がってきます。そうするとユニットケアよりも、もっとコンパクトなものが欲しいよねってことで、家庭的な雰囲気を目指してグループホームがスタートしました。

栗本 しかも地域の中で。
坂中 根洗町は、ケアホームを街中にくることを本当に温かく受け入れてくださいます。自治会長さんをはじめ本当に障害者に理解の深い地域だなと思います。

ラポール根洗は働く場所ではなくて、作業所から夕方帰ってきて、買い物をしたり、美味しいものを作ってみたり、時



工房だんサービス管理責任者 大橋奈実世

ます。今日はその中で、特別養護老人ホーム静光園、それから、法人の成りたちにも関わってくる目のご不自由な方の最後の生活を支えている養護老人ホーム第二静光園から話を伺います。

家現 静光園は旧浜松市では一番最初にできた特別養護老人ホームです。初代園長だった平野綾子先生が視覚障害の方の終の棲家を作りたいと法人が設立されましたが、当時はまだそういうニーズは少ないから先に特別養護老人ホームを作ってほしいってということで、始まったのが静光園です。その後に念願叶って「盲老人ホーム」として第二静光園ができて、その後に二つ目の特別養護老人ホームの第三静光園ができ、平成二十年には小規模多機能在宅支援事業のなごみの家が出てきて、今四つの老人施設となりました。

高齢者施設においても先ほどのいわゆる「存在」の意味が大切だと思います。声をかけてもらったり、目と目が合った

りとか、自分の存在に気づいてくれるっていうことが何よりも大切です。本当はそのままの自分を認めてくれる場所は何よりも家族です。それが家族の一番いいところですよ。しかし、高齢になると自分でやれないことが多くなってきたり、介護を必要とするようになる。親が障害者になっっていくわけです。障害児の親が受容に悩むように、家族は要介護となった親の変化をどう受容するか悩むことになり



ラポール根洗世話人 坂中夕也

には作業所の愚痴も聴きながら暮らしの応援をしています。私も三月までは根洗作業所にいたものだから、こんな風に僕は言われていたんだなと思いながら反省もしています。

すごいとほめられること

大橋 私は今、工房だんということでサービス管理責任者をしております。工房だんは、根洗寮で生活されている方たちの、職住分離という考えのもとでの、昼間に活動する場所の一つです。直接的に利用者さんと一緒にモノ作りをしたり生活の介護をしているのが今の仕事です。浜松協働学舎の理念でもあります。が、昼間の活動を通して自分たちも社会に貢献できる、働くことで生きがいを持つことができるように、利用者さん達の生活に貢献できたらと思っています。

栗本 暮らしの支援と日中活動支援のそれぞれの役割の違いはどのようなことですか。

坂中 昨年までは根洗作業所にいたので、そちらの話をします。浜松協働学舎の利用者さんの仕事では、「しまうま俱

ます。「親」に対する認め方に葛藤が生じるのです。子にとってはいつまでも元気でいてくれるのが親、いくつになっても元気でいるのが親。その親が歩くのもできなくなると、認知症になっていく。そういう姿を受け入れられない。すると高齢者本人も自分の居場所を見失ってしまう。人が人を援助するということは、その人が安心して過ごせる場所をつくること、それは障害者施設も高齢者施設も同じです。

栗本 障害者分野の方の話を聞いていると、本当にその人がやりたいこと、暮らしたいスタイルというものに沿った形を追求しているのを感じるのですけれど、老人ホームでは「集団生活だからそこまでできないの、ごめんね」というのがまだ聞かれることがある。一時期に比べればだいぶ少なくなりましたが。

利用者本位とは

家現 学園にしても学舎にしても、親がしっかり関わっていいなって思いました。高齢者施設では入所者の親はまづいない。そうすると子どもが保護者になる。家族との密着度が違って、「施設にお任せします」という家族が多いです。

今の静光園では、四人部屋と個室とがあります。ある程度自分でいるんな判断ができて、自分の世界を持つていらつしやる方は個室を望まれる方が多い。ご家

楽部」というブランド名でクッキーやパンを作ったり、「遠州根洗窯」では陶芸を作ったり、「皐月堂」というせんべいを作ったり、卵を仕入れて販売したりという自主生産事業が活発です。私は去年までクッキーの生産を担当させていたでいていました。利用者さんと一緒にクッキーを一つひとつ、成形して焼き上げて作ってパッケージをしていく仕事です。それ自体もとても面白いのですが、利用者さんが仕事をやっているのを見てみるとそれ以上にすごく楽しそうにやっている。それはなぜかという「任されている」「役割と責任がある」「誇りを感じる」ということです。昔は何をすればいいかわからないとみんな悩んでいた時期もありましたが、二十何年やってきて「今ここに居る！」という自分の居場所、自分が認められる場所っていうのができてきたのだと実感しています。ここに来れば認めてもらえる、すごいねって言ってもらえます。見学の人たちは、みんな感動して帰ります。計量機を使わないでも全部同じ重さでクッキーの生地を丸めるさまを見て「すごいな」と見学の方に言われるのを聴いて僕らも嬉しくなります。

しかし、作るからには売れないと続かない。売れるものを勉強したり、営業や販売促進や商品開発やコスト計算などもしなければいけない。ここがすごく悩む



第二静光園生活相談員 永田竜也

族も「まあ、本人が望むなら」と個室を選択される。だんだん障害が重くなってくると選択する主体は、子になるんです。そうすると、変な話なんですけど「多床室に移して下さい」と。お金の問題もあって。判断の基準が本人から子の都合に移ってしまうことが多いのです。

栗本 そのあたりは、職員の意識を変えなきゃいけないと思う。利用者本位ってことを本当の意味で考えたら、日頃毎日その利用者の方と接している私たちは「こう感じるんですよ」「本人はこういう暮らしをしたいと思ってるんですよ」ということを、ご家族にもっと声高に言ってもいいのになって思っています。いくら相手が家族であっても、ご利用者の代弁者、アドボカシーとしての機能を発揮してきつちり言う必要があるんだろうなと思います。

第二静光園では、目のご不自由だけでなく意思決定のレベルはしっかりした人が多いと思いますが、養護老人ホームで勤務されている永田さんは、自己決

ところだと思います。工賃は利用者さんの暮らしを支える基盤です。で、それを保障する為には売り上げを伸ばさないといけない。実はそういう計算や商売が苦手だから福祉の分野に来た人も多いのですが、逆に市場のことを本格的に勉強しないとできないので、これは大変かなあって思っています。

大橋 誰かに認められたりとか、自分の役割とか居場所があるっていうことは、生きる力の基盤であって、そういう場が浜松協働学舎だと思います。自分たちが作ったものが世に出て、買ってくれる人がいて役に立つ、それが社会参加してるとか、生きがいにもつながっていくと思います。私は日中活動の支援をする立場なんですけど、ケアホームに帰ってきて居作業所であったことを話したっていう話がありました。逆もあります。工房だんに来て、今日朝ケアホームでこんなことがあったよとか、あの人と一緒に住むのはちょっと嫌だみたいなことを言ったりとか、そういうのを違う場所と言えるっていうことも、自分の思っていることを聞いてくれて受け止めてくれる人がいることはすごく大事なことでと思います。

尊厳が保障される場

栗本 ひかりの園では、高齢者に対する支援を行っている施設が四カ所あり

定、自己選択についてどのような考えをお持ちになりますか。

永田 第二静光園への入所は市町村からの措置が原則ですが、支援の本質的な問題として「利用者本位」という立場を大切にします。その人が、その人らしい生活を可能な限り実現できるように期待に応えたいと思っています。

第二静光園には、それまで独居で何とか暮らしていた人が経済的な問題で入居される方が多い。しかし失礼な言い方ですが、地域の福祉支援の仕組みからあふれてしまった方々が来ているところがあるって、そこを考えると、地域で暮らせる仕組みがあれば施設を出ることも出来ると思います。養護老人ホームの役割としては、施設で生活が正しくでき、ある程度お金を貯めることができた、在宅に帰る支援をすることだって当然あっていいと思います。実際ここ十年で二人在宅に戻られました。そういう流れがあって当たり前です。

住み慣れた地域での暮らしを支える

栗本 さて、できる限り住み慣れた地域、住み慣れたお宅で暮らし続けたいと願う。在宅サービスをフルに活用しながら住み慣れたところで暮らし続ける。でもそれが「もうとても無理なんです」「これ以上やったら家族共倒れになったんですよ」というレベルになったときに

在宅サービスをさらにバックアップするために施設サービスを利用するようになる。そこまでの段階に来てしまった人が、再度家庭に戻るのには本当に難しい。特養は必要だと思うのですが、在宅で支えるシステムがもっと発展していく可能性はないのでしょうか。

家現 静光園では、在宅のケアマネさんがいて、事業としてはヘルパー、デイサービスとショートステイをやっています。後は地域に他の事業所がありますので、連携を取りながら在宅での暮らしを支援しています。でも、施設への入所を視野に入れながら在宅支援をしている感じは否めません。

ひかりの園では、小規模多機能在宅介護事業として、なごみの家を運営しています。家において普段は通う、行けない時はその職員が今度家まで来てくれる、たまにそこに泊まることもできる。これはすごいことだと思います。同じ顔ぶれで、本人も安心する。これが広がってけば、住み慣れた地域で最後まで暮らせる仕組みに近づきます。地域を拠点とした在宅支援の仕組みです。

永田 第二静光園では、一人暮らしの高齢者の方にお食事を届けるサービスを行っています。栄養をちゃんと届けることはもちろんですが、安否確認したり困りごとがないか確認することが本当は大切な業務になっています。地域に積極的に

手を伸ばす姿勢で施設から出て、地域に足を運んでいくことが「在宅」と「施設」の壁を取り払う一歩だと思います。

地域とつながり

栗本 私たちの仕事は地域を切り離して考えることはできない。ひかりの園は今まで北区根洗町という地域をベースに事業展開をしてきました。根洗町の地域ではとても理解が得られている部分もあるし、根洗町だからできた事業がありました。平成十三年には静光園が南区小渡町に移転し、南に新しい拠点ができました。今年は四月に西区大久保町に根洗学園関連の施設「子ども支援センターたつく」がオープンし、地域の方々に温かく迎えていただきました。来年は、同じく西区で、大久保町の隣の大人見町に浜松協働学習舎関連の通所施設「工房ゆう」、次の年はその隣接地にグループホーム「コムニオ湖東」が開設される予定で、八月には大人見町自治会長を始め、西区の関係の方々にご参集いただき起工式が行われました。こうして当法人も今までは違うエリアで事業を展開するようになりました。地域に定着していくためにはどのようなことをすればよいか、十年ほど前に南区に移転した静光園の移転先での努力を参考にできればと思いますので教えてください。

家現 一番最初に取り組んだのは自治会



司会 第三静光園園長 栗本昌紀

りの園」であることを確認しました。それぞれの場面でご利用者を中心とした、周囲の人たちと一緒に

思います。幼児期から学童期までつながっていく支援をしたい。ここがつながると、ひかりの園は本当にライフステージすべてを支援できる体制となります。

菊地 私も同じ気持ちで、地域の人々が「見通し」を持って、安心できるライフステージを支える環境整備を実現していく、これを三万原の土地で実現したいと考えています。

子供たちと野菜を作っていて、親御さんから「野菜作りは恐るべし！」と、一切トマトを食べない子が、収穫したトマトをすぐ口にしたのです。今年の夏の忘れられない話です。野菜を作って、究極のカレーを作りたいということが私の夢です。じゃがいもは絶対に三万原男爵で、玉ねぎは篠原、にんじんはどこですかね？いいものを集めてできるカレーライスのような「ひかりの園カレー」ができるのかなって思います。地域のいいもの、それをギュッと詰め込んで、煮込んでできるような福祉が実現できたらいいと思っています。

坂中 誰にでも頼っていたけるような地域福祉の核に、社会福祉法人ひかりの園がなっているように私自身努力をしていきたいと思っています。ひかりの園に来れば何とかなるという安心があればと思うのですが、そんなに簡単ではない。まだまだ今の制度で解決できることは少なく、必要な支援をどんどん民間レベ

との関係をつくることでした。小沢渡に夏祭りがなかったので「じゃあ、静光園の納涼祭を、小沢渡の夏祭りにしてもらえたらありがたいね」という働きかけをしたことが糸口でした。赤字前提で納涼祭を開催して、地域の人たちに「来て下さい」と無料サービス券を配って歩きました。そういう努力で徐々に人が来てくれるようになって、今は地域の夏祭りとして定着してきました。また、防災の訓練の時の避難場所として実際に施設に来ていただくようになりました。

京極 行政からは「たつく」は地域の防災拠点という位置づけで補助を受けています。建物が丈夫であることと、防災食や非常用飲料を蓄えています。「たつく」は開設当初からは地域と密着していて、地鎮祭も大久保町の神社の神主様が好意でやってくれたり、開設後すぐにたけのこ掘りに招待されたりで私たちも驚いています。

大橋 来年大人見で開設する「工房ゆう」では、西区は農業が盛んなので農業の作業を通して地域と関わりがもてないかと考えています。「工房ゆう」には地域交流のスペースや多目的ホールを設置しますが、事業所の中に地域の方たちが入ってきていただけのような開かれた施設を目指したいと思います。地域に対して積極的に関わりをもっていくようにしたいと思います。

ルでやっていかないとはいえないと思いますし、そういうところができる法人でありたいなと思っています。

大橋 自分自身としては、福祉サービスというところがあるのですが、人と人が関わる根本のところ、利用者や職員という関係を離れて、分かり合えればと考えています。たくさん思いを持っている本人さんがいる、それを汲み取る私たちがいて実現することだと思います。一人ではない、お互いに支え合うということ、「喜ぶ人とともに喜び泣く人とともに泣きなさい」を忘れないで仕事をしたいと思っています。

家現 時代が変わり、特にハード面では昔に比べるととても恵まれた環境になってきました。介護用品も各種豊富になり、価格も下がっています。これはいいことではあると思います。しかし、最近気になるのはモノが溢れ、便利になって、職員としてそれが与えられるのが当たり前となってきました。「今ある条件からどのように工夫していくか」を考えることが乏しいように感じます。「〇〇がないから出来ない、〇〇がないから買っほしい」の前に、職員には自分達で知恵を出し合って創意工夫してほしいと望みます。モノや情報などが豊富に溢れている今だからこそ、何が援助なのか、大切なことが何かを見失うことなく求めなければ

喜ぶ人とともに喜び、泣く人とともに泣きなさい

栗本 これで一通り皆さんのお話を伺ったんですけども、私たちの法人訓である「喜ぶ人とともに喜び、泣く人とともに泣きなさい」の基本姿勢が意識的にも、無意識的に実践されていると感じました。

障害があるために周りからの否定的な評価を受けて自分の存在意義を見失っている人たち、子どもたち、リタイヤをしたことから社会的な存在意義を見失いがちな高齢者の人々、その人たちにその人たちなりの存在意義がちゃんとあるんだよとその人のそのままと認めていくこと、それを周囲の人たちにもわかってもらおうという働きをそれぞれの分野で皆さんが行っています。それが福祉のあるべき姿だと思いますが、これをフロントに押し出して活動しているのが「ひか



静光園生活相談員 家現多加志

ばならないと思います。

また、就業年数を重ねたことで得た経験を次の世代に伝えるのも、年齢的にも私の務めではないかと思っています。

永田 全国盲老人福祉施設連絡協議会という盲老人ホームの全国規模の組織もあって、全国組織の場に行くと初めて知ることがとても多くありました。施設の中にいると気付かないことがあって、私も施設を出て社会に参加することで新しいニーズを発見していきたいと思っています。例えば、県内唯一の視覚障害者の施設であるノウハウをガイドヘルパーの支援で地域に還元してほしいという声もあります。利用者さんも介護度にだいぶ差があり、元気な人はすぐ元気で、そういう元気な方は施設に入る前にケア付き住宅があれば、措置を受けなくても生活ができると思うので、そう仕組みを実現するために積極的に外に出て知識や情報を得たいと思います。

栗本 これだけの種別の事業を抱えている法人なので、その機能がそれぞれ有意義に活用できるような仕組みを作らなければならぬと思います。横断的な総合相談センターのような窓口が法人に一つあってもよいのではないかと思います。本当にお忙しい中、ありがとうございます。同じような討論会が二回三回と持てたら面白いなと思います。

私たち、ひかりの園の職員です。

本部事務局

のばた まさひろ
野畑 雅弘



法人の事務局で主に老人福祉施設の会計出納員、ホームページの管理人、新卒求人の管理人等を行っています。野畑雅弘です。出向いた先の施設内でも地味に仕事をしているため、顔は見たことがあるけれど誰？と思われるという方も大勢いると思います。これを機に、私のことを頭の片隅にでも置いて下さい。

今年八月よりリニューアルしたホームページはスマートフォンでもきれいに表示できるシステムを採用しています。職員には法人内の他施設や他部署がどんな活動をしているか新着情報等を見てもらい、また自分達の施設や部署でも「こんな活動をしている」というのを外部にどんなアピールする情報源として活用してほしいと思っています。外部からの閲覧者にも、ひかりの園の事業の理解や法人のサービスマン利用、ボランティア、求人等の情報にアクセスできるように内容を充実していきたいと思っています。また、災害時の対策としても利用できるような仕組みができればと思います。ぜひ、ひかりの園ホームページを活用して下さい！



青葉の家

よしだ ときなり
吉田 時成



青葉の家のリーダー生活支援員、吉田時成です。時成は「時は金なり」と勘違いされませんが、「その時にすべきことを成せ」という意味で頂きました。

私が青葉の家へ勤めはじめて早や五年、改めて気づいたことは、何事にもその旬があり、タイミングを見極めることの大事さです。ご利用者への支援では、その場その時に声をかけるとしても理解されやすいですし、担当している陶芸作業では、少しでも遅くなると粘土が乾いて失敗することもあります。その時の状況判断を正確にし、きちんと実行できるようにしたいですね。

福岡出身の人間としては好物のどんこラーメンなしでは生きていけないですが、とくに今はインスタントラーメンの調理法にこだわっています。地元人のこだわりとは！お湯を注いで三分の二ころを2分強で済まして、カタ麺でいただきます。このタイミングが重要で、硬いもの好きにはたまりませんが、皆さまはお腹を壊さないよう自己判断をお願いします。



ねあらい学園

あんま まい
安間 舞



① 自己紹介・業務紹介
児童発達支援センター 浜松市根洗学園 安間舞です。毎日通園の年長児グループ、保育園や幼稚園との併利用グループの子じか年長グループを担当しています。

② 子どもとの関わりでピっときたこと
子どもの発想力に驚かされたり、可愛さに笑わされる毎日です。粘土遊びをしていた時「うどんぐり！」と言いなからお菓子の空き箱を持ってきたAくん。箱を開けると、細長いたくさん白い粘土に水をはって割り箸が添えられていました。子ども達が、イメージを表現出来るようになってきたことに成長を感じています。



③ 趣味・はまっていること
週末は時間を見つけて3歳から続けているピアノを弾いています。最近は、お気に入りのピンク色の一眼レフカメラで人の横顔を撮ることはまっています。いつかインドに行き、現地の子ども達や機関車の写真を撮ることが夢なので、それまでに技術を磨いている最中です！

40周年おめでとうございます！

静光園の活動によって強められた

「絆」

ボランティアサークル波紋 代表 荻野英子



今からおおよそ三十五年前、浜松市青年婦人会館（現在建設中のあいホール）で開催された「女性のためのボランティア講座」の受講生たちが、講座の終了後「このまま何もしないで解散するのはもったいないね」ということで結成されたのが「波紋」です。各自活動しやすい場所にグループ分けしてボランティア活動が始まったのですが、現在まで続いているのは静光園でのグループだけになっています。

現在も続いている音楽レクリエーション（以後音レク）は静光園が根洗町にあった頃に始まりました。その頃の利用者さんは、戦地で戦った経験のある軍人あがりの男性や、夫やわが子の戦死により心に痛みを持つ女性の方など、戦後の傷痕がまだまだ尾を引いている状況にありました。男性は元氣よく軍歌を歌いたい。女性はそれを聞くと夫や子どもを思い出し沈みがちになる。選曲にも心配（こころくば）りが必要でした。ある寮母さんに「シヨロシヨロした童謡でなく元氣のいい軍歌を歌って下さい」とクレームをつけられ（軍歌ばかりやってるわけにいかないのもう止めよう）と思った時、カトリックの信者であるSさんという方から「先生、私たちを見捨てないで下さい」と声を掛けられハツとしたことがあります。その一言はまさに聖書の一節でした。（音レクはだれのためにやるの）



められた気もします。その後、根洗作業所や青葉の家が設立され波紋の活動は作業所の利用者さんのための昼食カレー作りが始まりました。五〇六人が当番で出掛けワイワイガヤガヤ賑やかに楽しいひとときでした。波紋にとつて忘れることの出来ない大切な思い出のページになっています。

現在の波紋は、根洗時代に新しく参加して下さった方、たまに活動に参加する人を含めおよそ十名です。波紋も徐々に高齢化して殆どが孫のいる年齢になりましたが、気持ちだけはまだまだ元氣です。

：とそれ以後は二度と（止めよう）などと思わない決心をした日もありました。今にして思えばそのSさんの一言で決心が強

第二静光園の苦情・相談等の報告（平成25年3月～8月）

- ① ご利用者より（3月6日懇談会の席にて）
内容：市から交通費助成券としてタクシー券を買っているが、使いきれないことが多い。無駄にしないように外出を自由にしてほしい。
対応：タクシーの補助券は、乗車してはじめて金券として利用可能であり、乗らなければ使われないので、無駄に捨てられるわけが無い事を説明しました。また外出は、付き添い者に外出届を記載頂くか、希望外出時に職員が付き添うことなどで使っていただくこととしており、単独での外出はご遠慮いただくことを説明して承けて頂きました。
- ② ご利用者より（4月18日の相談コーナーにて）
内容：日常生活用具は安く購入できますか？
対応：現在の制度では、養護老人ホームの入所者は実費購入という状況であることをお伝えしました。施設として可能な範囲で用具の一部を整備する等、検討することを説明し、了承して頂きました。
- ③ ご利用者より（4月3日の懇談会にて）
内容：食材の切る大きさに基準はありますか？また、生野菜をもっと食べたい。
対応：ご利用者には入れ歯の方もいて少し柔らかく、スプーンにのる程度の大きさに切っていること、生野菜については食材によっては湯通しや、火を通すことを了承して頂きました。
- ④ ご利用者より（8月28日懇談会にて）
内容：補聴器を使っているのに、マイクを通した声が響き、聞き取りにくい時がある。音響の調整はできますか。
対応：食堂の拡張に伴い、スピーカーを増設しています。声が小さく聞こえにくいという話が多かった為です。その影響として声の遅れや、補聴器の方は聞きづらいことがあるかもしれません。スピーカーの位置の調整、職員の話し方に気をつけるなど、できることをすると伝え、了承して頂きました。

ワンポイント介護 《認知症とうまく付き合おう》

年をとると認知症になる確率が高くなり、100歳では**100%認知症**になるそうです。みなさん「認知症になるのはいやだな」と思っていないですか。そして、身近に認知症の方がいると、どのように接してよいのかわからない。どこまで悪化していくのか、凶暴になったり徘徊しないかといった不安がよぎります。

人間、年をとれば大なり小なり脳の機能が落ちます。仮にそうであっても、日常生活に支障が出ないようなお年寄りの居場所や役割があればいいわけです。認知症の方は「いいお爺さん」や「いいお婆さん」だと思って下さい。昔なら縁側でお茶を飲みながら、たとえ相手が誰だかわからなくても、来客がくれば挨拶する。それが役割だと思っているのです。でも今は社会構造が変わって、縁側のない建物も増えています。文字通り、縁のない社会になってきているんです。昔、縁側にいたお年寄りは居場所がなくなり、どのように生きればよいのか困惑している。家族も「困ったな」と思うようになってきています。

「排泄行為がうまくできない」「同じことを何度も言う」「無目的にウロウロする」そうしたことがたび重なり問題行動として相談を受けることがあります。そんな時、衰えると「そういうものなんだ」とみんなが考えれば、お互いが穏やかに過ごせると思います。「**子ども扱い**」や「**どうせ言ってもわからないだろう**」は以前より感性が敏感になっているとされる認知症の方には**NG**です。あくまでもひとりの人格として向き合わなければ、よりストレスを与えてしまいます。また「**何でできないの?**」と怒るのは一番やってはいけない事。本人が一番分かっている一番苦しんでいる部分なんです。また、不安だから何度でも同じ話をし、ちゃんと伝えようとしているんです。だから**何度でも聞いてあげて下さい**。それを「お父さんは昔は立派な人だったのに、なぜこんなになってしまったの」と家族が不安を持ったり、悲観した態度で接していけば、扁桃核がビビッと働いて、自分のことをまわりは怒っている、いやがっているという感情だけが伝わるわけですよ。そうすると、いやな感情だけがすり込まれて問題行動が起こってしまう。そうならないように家族は「年を取るということはそういうことなんだ」という**あきらめの境地**が肝心です。年齢を重ねれば誰もが衰えてくるものなのです。残っている機能を上手に刺激してあげて、喜びを常に引き出してあげて下さい。



社会福祉法人ひかりの園概要

社会福祉法人ひかりの園 理事長 川島順三

法人本部 事務局 太田敏明

〒433-8108 浜松市北区根洗町 681-5 TEL(053)437-8289 FAX (053)430-0819 Eメール info@hikarinosono.or.jp

■特別養護老人ホーム 静光園 園長 山中康義

■小規模多機能型居宅介護事業 なごみの家 管理者 鈴木佐知子

■養護盲老人ホーム 第二静光園 園長 佐藤三四二

■養護盲老人ホーム 第三静光園 園長 栗本昌紀

■児童発達支援センター 浜松市根洗学園 園長 松本知子

■子ども発達センター たつく 園長 松本知子

■生活介護 根洗作業所 所長 深見 誠

■生活介護 青葉の家 所長 犬塚 淳

■生活介護 工房めい 所長 鈴木秀明

■障害者支援施設 浜松協働学園根洗寮 寮長 高木誠一

■ケアホーム ラポール根洗 寮長 深見 誠

■ケアホーム すてっぷ・ほっぷ 寮長 櫻井裕美

■ケアホーム こもれば 寮長 犬塚 淳

■ケアホーム ぱれっと 寮長 高木誠一

■浜松市障害者相談支援事業所 まど 所長 高木誠一

■手作り陶器・手作りクッキー・焼きたてパンのお店 しまうま倶楽部